



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	保育者は〈気になる子〉をどのように語るのか
Author(s)	美馬, 正和; Mima, Masakazu
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 115, 137-152
Issue Date	2012-06-29
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.115.137
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49541
Type	departmental bulletin paper
File Information	Mima.pdf



保育者は〈気になる子〉をどのように語るのか

美馬正和*

How do Kindergarten Teachers Perceive the Term of “Difficult Children”.

Masakazu MIMA

【要旨】

本研究では、保育者の語りから〈気になる子〉に対する捉えや視点がどのようなものであるかを検討するため、私立幼稚園の保育者12名から聞き取り調査を行った。その際、①現在テクニカルタームのように使用されている「気になる子」についての認識、②日頃保育の中で感じる「気になる」という視点の2項目を設定して調査を行った。

結果として「気になる子」という言葉は、保育者が学習をしていく中で獲得したものであり、発達障害と一直線上にあるような受け止め方をしていた。そのため普段の保育では使用しない言葉であった。次に、日頃保育者が「気になる」と思う子どもは、生活の中にある困り感を持つ子どもや、保育者が違和感を覚える子どもであった。

この結果から、保育者は子どもとの関係の中で「気になる」感覚を持つ。そのため、「気になる子」という言葉は保育者にとって日常的な言葉ではないことが示唆された。

【キーワード】

〈気になる子〉、保育者、関係論、インタビュー調査、子ども理解

問題と目的

(1) 〈気になる子〉^(注)の背景

幼稚園や保育所では、子どもが賑やかに走りまわり、遊びに熱中している光景を目にする。日々の保育は集団で行われる場合が多く、保育形態としては同年齢で構成される場合（横割り）や異年齢で構成される場合（縦割り）がある。どのような保育形態の場合であっても、幼稚園教諭や保育士（以下まとめて保育者と表記）たちが、日々の活動を考え、子どもの育ちに思いを馳せながら保育を組み立てているのだろう。

そのような保育現場では、保育者から「椅子に座っていることが出来ない子ども」や「周りの子どもとよくトラブルを起こす子ども」、「人の話が聞けない子ども」などへの対応に苦慮している話を聞く。近年このような子どもは、〈気になる子〉として保育者から語られることが多くなっている。

〈気になる子〉という言葉が保育現場から上がり、注目され始めた歴史的背景は、2点考えられるのではないだろうか。1つは、1970年代に幼稚園や保育所で障害児保育が制度化して実施されたという点、いま一つは、2000年代に入り軽度発達障害という言葉が登場し、実践現

*北海道大学大学院教育学院博士後期課程（発達教育臨床論講座）

場にも浸透してきたという点である。

まず、障害児保育の制度化についてであるが、障害児保育が制度化される以前は、一定の条件(特定の障害、障害児保育を行っている場所が近くにあるなど)を満たす子どもしか障害児保育を受けることが出来なかった。しかし1974年に、「心身障害児幼稚園助成事業補助金交付要綱」と「私立幼稚園特殊教育費国庫補助金制度」が当時の文部省から「障害児保育事業実施要綱」が当時の厚生省からそれぞれ出され、障害児保育が制度化された。このことにより、障害児が入園する際には、手厚い保育(加配保育士の配属、環境整備など)を提供する体制が整えられるようになり、さらに社会的な要請もあって、徐々に障害児保育に取り組む幼稚園や保育所が増えていった。それに伴い、巡回相談と呼ばれる支援も行われるようになった。これは、質の高い保育実践を行うために専門機関などから専門家が保育現場に赴き助言を行うという、保育者への支援である(浜谷, 2005)。

本郷(2011)は自身が巡回相談にかかわり始めた時と現在とでは相談内容に違いがあることについて以下のように述べている。

「統合保育(障害児保育の一つの形態)が広がり始めた1975年以降(昭和50年代)から巡回相談にかかわり始めたが、当初「ダウン症の子どもはどのように発達していくのでしょうか?」「自閉症の原因はなんなのでしょうか?」といった障害の特徴や障害のある子どもの一般的な発達についての質問を受けることが多かった。その後保育者の間に障害についての知識が広まるにつれて、そのような質問は少なくなった。その代わりに、「視線が合いにくい自閉症児とのコミュニケーションをどのようにとったら良いのでしょうか?」「障害のある子どもへの個別的なかわりをどのように工夫すればよいのでしょうか?」といった具体的な保育の進め方についての質問が増えた。しかし、2000年前後位から状況が変わってきた。障害のある子どもよりもむしろ障害とは判定されていない子どもの保育についての質問が増えてきたのである。「知的な遅れはないと思うのですが、落ち着きがなく、他の子どもとのトラブルが多い子どもをどのように理解したらよいのでしょうか?」などを受けるようになった。いわゆる「気になる」子の出現である」(pp.59-60)

本郷は巡回相談にかかわりながら、保育者から寄せられる質問が変化していることを感じていたのだろう。障害児保育開始当初は、上記の制度の対象である障害児についての相談内容だった。しかし時間の経過とともに、保育者の相談内容が変化し始めた。それは、障害児としては入園していないが、保育を行っていく上で、保育者が困惑したり、戸惑ったりする子どもへの対応や理解についての相談である。このような子ども達がやがて〈気になる子〉として一般に語られるようになったものと思われる。

次に、軽度発達障害という言葉の登場が考えられる。この軽度発達障害は、概念や定義が曖昧であるにもかかわらず、あたかも新しい診断カテゴリーであるかのように認知される言葉となった。田中(2008)によれば、軽度発達障害という言葉は、2005年に施行された発達障害者支援法や2007年から実施されている特別支援教育の導入において、制度的に「学習障害、注意欠陥多動性障害、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害といった文言」(p.12)として明記されるかたちで影響を与えた。これは軽度発達障害という言葉を使

用する場合、脳の機能障害の判定が非常に困難で、境界線の引きにくい状態であり、関係性の障害として使用されていたのだが、一般に広がっていく中で、使用の仕方にズレが生まれた。このズレが次第に大きくなり、2007年3月15日に文部科学省初等中等教育局特別支援教育課が「『軽度発達障害』の表記は、その意味する範囲が必ずしも明確ではないこと等の理由から、今後当課においては原則として使用しない」と発表している。結局この発表を機に、軽度発達障害という言葉は下火になっていくのだが、田中(2008)は「軽度発達障害という用語がなんらかの、しかし決して小さくない役割を負っていたことは、臨床と教育の現場にいる私にとっての実感としてある」(p.12)と述べている。結果としては、軽度発達障害がきっかけで、発達障害に注目が集まったということになるだろう。

鯨岡(2007)によれば、発達障害に注目が集まったことは対応の難しい子どもが発達障害という範疇に入れられて理解されはじめることで、日常的な対応の難しさ、友達関係の難しさ、学習指導の難しさといった子どもの扱いにくさが、子育てや指導の問題ではなく、障害ゆえの難しさであるという認識に切り替わり、子どもをみる大人の視点に変化をもたらしたという。このような視点の変化が保育現場でもおこり、保育者がグレーゾーン(障害かどうか曖昧な状態)の子どもを障害児に近似したカテゴリーとして認知するようになったのだろう。

このように保育現場で語られている〈気になる子〉は、上記で述べてきたような点が土台となっていると考えられる。

(2)〈気になる子〉の術語化

ここまでは〈気になる子〉という名称が使用されはじめた背景を述べた。近年では、〈気になる子〉という名称がいつそう幼稚園や保育所などで定着しつつある。それを表すように「気になる子」という表現について藤永(2009)は「保育の現場ではあたかも特別な術語のようなニュアンスを込めて用いられている」(p.30)と述べ、田中(2009)は「保育界においては1つのテクニカルタームになったといっても過言ではない」(p.57)と述べている。幼稚園や保育所で定着した「気になる子」という呼び方は、保育者だけでなく研究者達によっても語られている。

ところが、〈気になる子〉という表記を注意深くみとみると様々な意味のちがいがふくまれていることがわかる。例えば、「ちょっと気になる子」(刑部, 1998), 「ちょっと気になる子ども」(増田・七木田, 2000), 「気になる子ども」(石倉・仲村, 2011), 「気になる」子ども(飯島, 2008), 「気になる子」(肥後, 2001)などである。また、「他児との関係形成が困難な『気になる』子ども」(深谷・江田, 2011)など〈気になる子〉に子どもの状態を表す言葉がつく場合もある。このように表記の仕方が統一されておらず、同じ表記をしていても、その言葉が指す子どもの様子に違いがあったり、表記の仕方は違うが同じような子どもの様子であったりといった状況がある。

さらに、〈気になる子〉をテーマとした研究は実に多様である。例えば、保育者にアンケートを行い、保育者がどのような子どもに対して「気になる子」という感覚を持つのかといった保育者の意識調査や、実際に園やクラスにどのような子どもが存在していて、どのような子どもが気になるのか、そのような子どもの担任をしたことがあるかなどを聞いた実態調査がある。(肥後, 2001; 井口, 2000; 本郷, 2003) また、巡回相談に代表されるような、コンサ

ルテーションを行うことで「気になる子」の発達の状況と保育者との関係を良好に改善していくなど、外部支援の必要性を調査したもの（本郷，2007；日高，2008）や、「気になる子」に対してのチェックリストの作成（日高，2008）や5歳児健診（小枝，2007）などの事業を推進によって、早い段階でのフォロー体制の必要性を述べる研究がある。

以上のような研究のほかで表現されてる「気になる子」の状態像としては、例えば本郷の記述にあるように『知的な面での顕著な遅れはない』ものの、『他児とのトラブルが多い』『多動である』『注意がそれやすい』『ルールを破って自分勝手に振る舞う』（本郷 2010, p2）などの特徴を指すことが多い。このような子どもの状態像は、一般的な発達障害の行動特徴と類似している印象を与える。その結果、保育現場でも、〈気になる子〉は「発達障害」と同一線上の程度問題としてとりあげられるか、あるいは発達障害かどうかの診断の有無に帰せられる傾向があるのではないかと考える。

(3)「気になる」という言葉が持つ意味

ここまで〈気になる子〉についての状況をみてきたが、ここで「気になる」という言葉について考えてみたい。

私たちが日々の生活の中で「気になる」という言葉を使用するとき、それはどういう意識であろうか。例えば、道を歩いていて、あまり見かけない車が走ってきた時、「あの車の名前はなんというのだろう。気になるな」という使用の仕方がある。また、外出中に、ふと「あれ、家の鍵かけたっけ？」と気になるなどの場合もある。

このように、一般的に「気になる」という言葉を使用するとき、心配な時や気がかりな時に使用するだけでなく、心が傾くときや興味、関心を持った時にも使用する日常の言葉、表現である。

そこで、〈気になる子〉をテーマとした金字塔的な研究を発表した刑部（1998）は、より一般的な意味合いで「気になる」という現象を捉え、分析していた点に注目したい。刑部は、「ちょっと気になる子」だと保育者が感じている子どもの様子を主にビデオ撮影し、集団への参加過程を関係論的に分析している。この論文では、「ちょっと気になる子」が保育者や他の子どもとの関わりを通して、アイデンティティの変化があり、結論として「ちょっと気になる子」が気にならなくなるまで変化していく過程には、子ども個人の知的能力やスキル獲得という変化よりも、共同体全体の変容によることが明らかになったのである（刑部 1998, pp.1-11）。佐伯（1995）はこの論文を著作である『「学ぶ」ということの意味』の中で取り上げ、（佐伯1995, pp.152-172）そこでは、「ちょっと気になる子」について、担当保育者がどれだけ手を焼いているかを他の保育者にさらけ出し、他の保育者が担当保育者に同調する様になる。このことを通じて担当保育者の「構え」（子どもや他の保育者に対しての姿勢）が変化し、それに合わせて他の保育者たちも「ちょっと気になる子」に対する態度が変化する様子が書かれている。また、刑部（1998）の意見論文として、倉持（2000）は『「ちょっと気になる子」と保育者が捉えるとき、『ちょっと気になる』のは保育者であり、気になる中身は保育者の主観の中で捉えられていることが多い』（pp.225）と述べている。

これら刑部（1998）、佐伯（1995）、倉持（2000）で注目すべきところは、保育者側の意識に触れているところではないだろうか。倉持が言うように、「気になる子」という言葉が指す子どもの様子は、保育者の主観によるところがある。さらに佐伯が言うように、保育者同士

の関係が変化することで、保育者の「構え」に変化がおこり、子どもと接する時の態度、まなざしの変化を生み出し、子どもに対する保育者の評価も変わるだろう。そうすると、刑部が示した通り「気になる子」としての子どもの様子の変化とは関係なく、気にならなくなる場合が出てくる。これは、「気になる」という視点が保育者の主観であり、「気になる」が本来意味の定まりにくい曖昧で流動的な意識で使用されるからではないだろうか。もしそうならば、時間の経過の中で「気になる」「気にならない」という変化をしても不思議はないし、逆に変化しないこともあるだろう。また、同じ年齢のクラスを担当している保育者同士や同じ園に所属している保育者同士で「気になる」視点が違うこともあるだろう。

このように考えた時、一つの固定的なカテゴリーとして使用される「気になる子」は、保育の場でどのように使用されているのかについて検討する必要があると考えられる。もし、現在保育現場などで使用される〈気になる子〉が個体論として語られているのであれば、関係論の視点から見直してみることは意味があることでないだろうか。

(4) 本研究の目的

以上のことから本研究の目的は、保育者の語りから保育者の〈気になる子〉に対する捉えや視点がどのようなものであるかを明らかにすることにある。そのために以下の視点を設定する。

一つは、現在テクニカルタームのように使用されている「気になる子」に対して保育者の意識を明らかにすることである。保育者は「気になる子」をどのように知り、受け止め、使用しているのかを明らかにする。

次に、保育を行っているなかで実際に感じる「気になる」ことについての意識である。保育者は子どもとの関係の中でどのような視点を持って子どもに対して「気になる」という思いを抱くのかを明らかにする。

この二つの項目から保育者が〈気になる子〉をどのように捉えているのかを明らかにし、〈気になる子〉の再考、保育の充実を目指すための足掛かりにしていきたい。

方 法

調査協力園

X市にある私立Y幼稚園は、自然が豊かな山の中にある。園児たちのほとんどは通園バスに乗って登降園していて、通園バスには保育者が交代で添乗をしている。Y幼稚園には3歳から6歳までの子どもたちが在籍しており、その他、障害のある子どもも積極的に受け入れをしている。

クラス形態は調査当時3歳児3クラス、4歳児4クラス、5歳児3クラスあり、教師が1人1クラス担当している。保育活動を行う時には活動内容によって、同年齢で構成される横割りの集団と異年齢で構成される縦割りの集団の2パターンを使い分けて行う。調査当時には3歳児は常に3歳児で保育を行っていたため、活動をする時は4歳児と5歳児が縦割りの集団になって活動していた。

Y幼稚園の保育は、一般の幼稚園で行われている制作などの取り組みの他に、特色として

春と秋には山菜採りや木の実を食べに山の中へ散歩に行く、リズム遊びを取り入れるなど体を使う活動が多く見られる。その他に自由遊びを取り入れ、子どもたちが主体的に遊びを選択できるようになっている。

調査協力者

Y幼稚園所属の職員12名に協力を依頼した。保育者は男性2名、女性10名で、12名のうち10名はクラス担任、1名は園長、1名は担任を持たず子どもとかかわる、保育補助の保育者である。保育者の保育経験年数は平均16年(5-25年)であった(但し、調査当時)。12人中7名が、現在勤めているY幼稚園の他にも勤務した職場があり、Y幼稚園での勤務年数は平均11年(3-17年)である(但し、調査当時)。各協力者のプロフィールはTable1に示した。

調査協力者との関係

調査当時、調査協力園は保育を行っていく上で、人手が必要となりボランティアを探していて、筆者は調査協力者を探していたところだった。実際に「気になる子」といわれる子どもたちを抱えながら保育をしている調査協力園と「気になる子」についての研究を行いたかった筆者の思惑が一致し、5月から11月まで週2回程度のボランティアとしてかかわった。

調査時期

2008年9月から2008年10月。

手続き

調査者(筆者)がボランティアとして幼稚園を訪問した日で、1日の保育終了後に幼稚園の空き教室を利用して、調査者と調査協力者の1対1でインタビューを行った。インタビューは質問項目に準じながらも、調査協力者に自由に語ってよいという雰囲気を目指した半構造化面接で実施した。インタビューの全行程は調査協力者の承諾を得てカセットテープに録音した。インタビューのスケジュールは調査期間中に幼稚園で11日の調査日を設定し計12回、12名のインタビューを実施し、一人のインタビュー平均時間は約1時間12分(1時間4分—1時間33分)であった。

調査者は、インタビューの手順を書いた紙(インタビューガイド)を主に参照してインタビューを行った。また、インタビュー中に調査者は質問項目の書かれた紙を調査協力者にも提供しながら行った。調査者は調査協力者の自由な語りを促進することにつとめた。そのため、原則として質問項目の順番通りに行ったが、調査協力者によって順番が異なることがあった。

名前	性別	担当クラス	勤務年数	他園での勤務
A	女性	年少クラス	21年	有
B	女性	年長クラス	14年	無
C	女性	年長クラス	16年	有
D	女性	年中クラス	19年	有
E	女性	年少クラス	20年	有
F	女性	年長クラス	16年	無
G	女性	年中クラス	14年	有
H	女性	年少クラス	16年	有
I	女性	年中クラス	25年	有
J	男性	年中クラス	14年	無
K	女性	補助職員	5年	無
L	男性	園長	10年	無

Table1 保育者に関する情報 (調査当時)

調査者は聞き取りを行う前に、この調査には正答はなく、評価をすることもないことを伝え、思いのままに語るように伝えた。調査協力者の語る内容が抽象的になった場合は、詳細に語ってもらうように適宜質問をした。また、語られた内容が筆者の受け止め方と齟齬がないかどうか適宜確認を行って進められた。

調査項目

インタビューではあらかじめ以下の質問項目を用意した。

- ①「気になる子」という言葉を耳にしたことはありますか
- ②「気になる子」の学習をしたことはありますか
- ③先生は「気になる子」という言葉自体をどのように感じていますか
- ④先生たちの間で「気になる子」という言葉はどのように使われていますか
- ⑤「気になる子」と聞いてイメージすることはありますか
- ⑥保育を行っていて先生にとって気になるなと思う子はいますか

エピソードの抽出

まず録音したインタビューを逐語録に起こした。本研究ではその逐語録の中から、「気になる子」の知識と学習、「気になる子」という言葉の印象、「気になる子」の使用、子どもの見立て、保育者の葛藤、という5つの視点から、典型的と考えられるエピソードを抽出した。

結果と考察

Y園の保育者は「気になる子」という言葉を全員が耳にしていた。耳にした時期に関しては違いがあり、一番多かった回答は、3-5年前(6名)という回答だった。その他には15年くらい前という回答や12年前という回答があった。

(1)「気になる子」の知識と学習

ここでは保育者が「気になる子」についてどのような知識を持ち、どのような学習をしてきたのかについてのエピソードをいくつか挙げる。

エピソード1 (I保育者) 「学習の中で意識すること」 ()内は筆者加筆部分

(「『気になる子』という言葉を耳にしたことはありますか」の質問に対して)
 (3-5年くらい前から障害をテーマにした)講演会・研修会でしょうかね、持たれることがだんだん多くなってきているんですね。で、そういうところに行って、お話を聞いていくうちに、あ、そういう「気になる子」という言葉が使われている先生、講演の先生もいらっちゃったり、で、だんだん、あ、そういう、ほんとになんていうんでしょうかね、障害、障害っていう言葉ではない特別支援が必要な子とか、そういうようなこととね、ちょっとハンディがある子とかっていうような、こともありますけど、「気になる子」というのもその、うん、なんでしょうね、軽度な発達障害があるようなお子さんを指してのこう本なんかも出てますよね。だからそういう意味では、5、6年前くらいですかね、少しずつこう、意識しだしたっていうのは。

この保育者の語りから、研修などの回数が増えたことで、「気になる子」という言葉を目や耳にする機会が増え、外部から与えられた知識として「気になる子」を理解していることがわかる。そのため子どもとのかかわりの中で感じていることではなく、発達障害とのつながりを持った言葉になっていることが考えられる。

エピソード2 (A保育者) 「学習から知る『気になる子』」 ()内は筆者加筆部分

(『気になる子』という言葉を耳にしたことはありますか)の質問に対して)
 いろんな本を読んだりとかしたところで、「気になる子」っていうのをいろいろ本読んだりしてやっぱりそういう子(軽度発達障害を持つ子)達なのかなって言うのはありますね。

この保育者の場合も、保育を行っていく中で感じる〈気になる子〉ではなく、学習をしていく中で用語や概念として「気になる子」を意識している。そのため新たな概念として「気になる子」という言葉を獲得していることになる。

また、エピソード1・2の語りで、発達障害と「気になる子」は同一線上の様な語り方をしていくことがわかる。

エピソード3 (C保育者) 「学習後に残る不全感」 ()内は筆者加筆部分

(『気になる子』の学習をしたことはありますか)の質問に対して)
 なんか研修とかに行っても、気になる姿とかって、ば一って箇条書きで出されたり、[略]「そういう姿なんです。」とか、「なにになんなんです。」で終わってしまっ、その後どうしたらいいのって、そういう子いるよ、うちにも。って、だからその子にどうしたらいいの、どうかかわったらいいのっていうところまで、研修とか本ってなかなかないじゃないですか。だから、そういう研修に出るんだけど、いつもなんかこころ辺(胸あたりを指して)がモヤモヤしながら帰ってくるっていうか、うん。

この保育者の場合、研修などに参加する目的は、保育現場で接している子どもとのかかわり方や対応についての情報が欲しいためである。しかし、研修に参加をしても保育者が欲しい情報はなかなか提供されていない様子が語られている。

これらの語りから保育者は「気になる子」について学習をすることで認識していき、学習の中で発達障害とのつながりも理解しているようである。また、学習の中で消化できない思いを同時に抱いている場合があることがわかる。

(2)「気になる子」という言葉の印象

ここでは「気になる子」という言葉についてどのような印象を持っているのかについてのエピソードをいくつか挙げる。

エピソード4 (C保育者) 「何気なく使われていた『気になる』という言葉」

(『気になる子』という言葉を耳にしたことがありますか)の質問に対して)
 いや、いつくらいっていうのは、覚えてもなくて、自然に私たちも「なんかここが気になるよね」とか、「こういう部分どうなんだろうね」っていうのは、話をして、[略]何気なく使ってたの

かなと思いながら、うん。

この保育者にとって「気になる」という言葉は日常の言葉として、自然に何気なく使用していた。だから、テクニカルタームのように使用される「気になる子」に対して、いつ頃意識したかはわからないという語りになるのだろう。

エピソード5 (B保育者) 「使いたくはないが使ってしまう言葉」 ()内は筆者加筆部分

(『気になる子』という言葉自体をどのように感じていますか)の質問に対して)
 (「気になる子」は) あんまり使いたくないとは思いますがね。だけど、なんだろう、「障害があるっていうのと健常であるっていうの間」として使うっていうか、やっぱりそういう点ではその表現になっちゃうのかな。

この保育者の語りで注目したいのは、「障害と健常の間」としての使用である。これはいわゆるグレーゾーンと呼ばれる子どもたちに対しての使用と考えられる。この場合のグレーゾーンは、保育者が子どもの状態をみたときに、障害からくるもの(個体論)なのか、はたまた育ちからくるもの(関係論)なのかがわからず、判断がつかないということであろう。そういう意味で〈気になる子〉という言葉を使うのだが、「気になる子」の学習をする際、発達障害の概念に絡めて語られることから、保育者はあまり使用したくないと感じていながらも、使用してしまうのだろう。

これらの語りから、「気になる」という言葉は、普段から使用していて、意識をすることのない日常の言葉として使用している。だから「気になる」という言葉を使用する時には、保育者が気にしている具体的な子どもの状態と一緒に伝え共有していた。この場合の「気になる」には、なんだかよくわからない、グレーゾーンという意味を含めた言葉で保育者たちに語られていた。しかし、「気になる子」という言葉が発達障害と絡めて語られることで、保育者は「気になる子」という言葉を意識するようになり、保育者の意図と違った意味で「気になる子」を使用することになったのだろう。

(3)「気になる子」の使用

ここでは「気になる子」という言葉を保育者は実際にどのように使用しているのかについて、エピソードをいくつか挙げる。

エピソード6 (D保育者) 「普段は使用しない『気になる』子」

(「先生たちの間で『気になる子』という言葉はどのように使われていますか)の質問に対して)
 「あの子気になる子だよね」っていう言い方はしないかな。「気になるよね」、「こういう部分が気になるよね」っていう話はするんですけど、「あの子気になる子だよね」ってはやらないです。たぶん先生たちもあまり言わないんじゃないかな。話しても、うん、「気になるところがあるよね」とか、「こういうところは具体的に気になるよね」って、うん。そういえば「気になる子」ってあんまり使わないかもしれない。「気になる」っていうのと重なる「気になる子」っていうのと重なる気になるまでは重なる、重なっているの使っているようなイメージでいたんですけども、そういえば、うん、あんまり使っていないですね。

この保育者の語りから「気になる」という言葉と「気になる子」という言葉の違いが考えられるだろう。「気になる」は一般的な言葉であるため日頃から使用するが、「気になる子」になるとある一定の状態像を表すような理解へと変わってしまうため使用しない。このことから保育の現場において、必ずしも「気になる」という言葉が固定的な意味を持つものではないことが読み取れるだろう。

エピソード7 (H保育者) 「範囲が広がる『気になる』子」 ()内は筆者加筆部分

(「先生たちの間で『気になる』子という言葉はどのように使われていますか」の質問に対して) 園の中だけでは先生方は共通に思っているの、あの、今ここの園の子どもたちのことを共通に思っているの、(「気になる子」という) そういう使い方はしないと思います。でも、園外などの研究会なので、分科会などで話をする時にはそういう言葉を使います。すごく広い意味でとらえますよね。「気になる子」っていう子どもの方が。具体的にこういうところができない子っていうよりは、すごく範囲が広がると思うんですけど。そういう時(園内での会話)にはそういう言葉は使わないかな、はい。

この保育者の語りで「気になる子」という言葉が術語として保育の分野で広がっていることがわかる。保育者同士で「気になる子」という表現をすると何となく理解が出来るような、共通の言葉になっているという事だろう。しかし幼稚園の中では子どもの状態を把握する事が必要になるため、具体的に保育者が「気になる」ことを伝えて話をする。この保育者の語りから保育者の主観でとらえられる「気になる」と一般的に広まっている「気になる子」は使い分けられている事が考えられる。

エピソード8 (E保育者) 「子どもによって違う気になるところ」

(「先生たちの間で『気になる』子という言葉はどのように使われていますか」の質問に対して) 私の中ではAちゃんもBちゃんもCちゃんも「気になる子」ってまとめられちゃうと、なんか違うよな。それは違うよなって、この子はこういうところが気になるけども、Bちゃんはこういうところが気になる。っていうのは全然子どもによって違う。

この保育者の語りから、「気になる子」として子どもがまとめられることに違和感を持っていることがわかる。それぞれの子どもが持つ特徴が違うにもかかわらず、「気になる子」と表現をするとみんな一緒になってしまう。このことから保育者はそれぞれの主観で感じる「気になる」という事を大事にしながら保育を行っているという事が考えられる。

これらの語りから、保育者たちはそれぞれの主観で感じる「気になる」という事を大切にしながら保育に取り組んでいるということが考えられる。そして、保育者によっては「気になる子」と保育者が主観で感じる「気になる」を使い分けているのだが、保育者によっては意識せずを使用している事も考えられる。また、「気になる子」という言葉が広がる事で、その言葉が持つ意味に違和感を持つことも考えられる。

(4) 子どもの見立て

ここまでは、「気になる子」について保育者に語ってもらったエピソードであった。ここ

からは、保育者が主観で感じる「気になる」ことについて、いくつかエピソードを挙げる。

エピソード9 (F保育者) 「生活に困り感がある子」 ()内は筆者加筆部分

(「保育を行っていて先生にとって気になるなと思う子はいですか」の質問に対して)
 やっぱり一番最初に気になるなって思う段階のスタートは、やっぱり生活の中での困り感だったりとか、そういうところかな。[略] たぶんそっからもしかしたら(発達障害に)繋がっちゃう子どももいるんだろうけど、うん、でもなんか気になるなっていう私の中の次元はもっというと子どもに近い次元というか生活の中に近いかな。

この保育者の語りから、「気になる」と感じる事は、子どもが生活の中で見せる困り感であると語っている。この語りで注目すべき所は、発達障害に繋がるかどうかはさておき、「気になる」基準はあくまで子どもの生活の中にあるという点だ。これは子どもの障害の有無よりも、生活の充実、子どもの困り感に保育者が着目しているという事ではないだろうか。そこには保育者の主観で子どもを見た時に感じる「気になる」という感覚も含まれているだろう。

その他に保育者が実際にどのような子どもに対して「気になる」という感覚を抱くのか。それは例えば、「子ども同士が喧嘩になりそうな時に、喧嘩にはならず、何事もなかったように別れて、家に帰ってネチネチいう」場合や「姿勢の維持が出来ないこと」、「その場にあった声の大きさでしゃべることが出来ない」、「必要以上に手が出すぎる場合」、「生活習慣が身に付かない」などが保育者たちから語られた。

エピソード10 F保育者 「全体を見たときに感じる違和感がある子」

(「保育を行っていて先生にとって気になるなと思う子はいですか」の質問に対して)
 これっていうのはたぶんね、ないと思うんです。あの、なんせあのう、長く見てきて、んーっていう、たぶんなんとなく違うっていうところで、感じるんですけど、なんか何っていいないけど、何かが違うっていうところで気になるっていうふうになるのかな。[略]全体をこう見た時に、何か違うなっていうところで気になってくるかな。

この語りから、「気になる」というのは具体的なものではなく保育者としての経験や多くの子どもとの出会いから積み上げてきた感覚であることがわかる。保育者が子ども全体を見渡した時に感じる違和感は「何かが違う」という、経験をベースにした感覚的なものでもある。

エピソード11 J保育者 「経験からくる判断を満たさない子」

(「保育を行っていて感じる先生にとって気になるなと思う子はいですか」の質問に対して) やっぱりこう、経験上、その年代の子どもに対して、これくらいはできているであろうという、なんて言うのかな、自分なりに持っているものを満たさないお子さんですかね。やっぱり成長がどうなんだろうとか、でもだいたいこう、年を重ねるごとに一目見るだけで、んっていう時も多々ありますけど、[略]なんかピピツという、くるものがありますね。

この保育者の語りから、保育者が経験を積み上げていく中で、保育者自身が基準の枠を作りその基準を満たすかどうか「気になる」かどうかの基準になる。また、保育者としての経験を重ねていく中で研ぎすまされる感覚というのもやはり一つの鍵になって「気になる」という感じを抱くということである。

エピソード12 I保育者 「他機関とのかかわりのある障害の傾向がある子」

（「保育を行っていて感じる先生にとって気になるなと思う子はいますか」の質問に対して）他のなんか施設っていうか、専門機関に行っていて、自閉的な傾向がありますとか、ってもう、最初からわかっているようなお子さんも入ってきているので、そういう子たちとかかわっていればその子たちのことも、気になるというかね、うん。

この保育者の語りでは、「気になる」と感じる子どもには、障害児や健常児ということとは関係がなく、「今ここ」でかかわりを持っている子どもに対して抱く感覚のようである。

これらの語りで注目したいのは、エピソード9、エピソード10の語りが同じ保育者から語られていることである。同一の保育者の中であっても、「気になる」と感じるポイントが複数あることが考えられる。子どもの生活の中での困り感を持ったり、子どもたち全体を見た時に違和感を感じる子どもに「気になる」感覚を持つ。また、それぞれの保育者がそれぞれで基準を持って「気になる」という感覚を抱いているのだろう。

(5) 保育者の葛藤

ここでは、保育者が保育を行っていく中で「気になる」ことに関連して抱く悩みや感じている事について、いくつかのエピソードを挙げる。

エピソード13 H保育者 「他のクラスや周囲から感じる精神的圧力」

（「保育を行っていて感じる先生にとって気になるなと思う子はいますか」の質問に対して（前に勤めていた幼稚園では）それぞれクラスがあったので、同じ年少組でも年中組でも何クラスかあったので、他のクラスと足並みをそろえなくてはいけないみたいな、そういうこう、自分にプレッシャーみたいなのもあって、それはまた子どもを保育していくのとはまた別な自分の想いっていうのも、あったので、そこには子どもを付き合わせてしまった部分は多かったと思うんですね。あそこのクラスに出来ているのに、なんでうちのクラスは出来ていないっていうふうに、こう見られて、指摘されるのか、そこをみんなと足並みそろえるためには、その子をやっぱり自分に合わせた保育ができるように引っ張ってこなくっちゃいけないみたいなことで、その子に合わせた保育では絶対なかったと思うんですね。

この保育者の語りから、保育者の置かれる状況で子どもに対して「気になる」という感覚を抱くということが言えるだろう。他のクラスの状態を気にしたり、周りの保育者からの評価を気にしたりすることが、保育者の意識に影響を与えている場合もある。だが、保育者は保育者の都合に子どもを合わせて保育を行うことに対して、決して良いことだとは思っていない様子が語られている。子どもに合わせた保育を展開していきたい想いと、周りからの

評価に保育者自身が追いつめられるような状況を感じ、そのことで子どもに対して「気になる」という印象を抱かざるを得ない状況に保育者がおかれるという事もあるのだろう。この場合、子どもの側の思いや様子よりも保育者の側に問題点が存在することになり、保育者の都合で「気になる」子の存在が作られていることになるのだろう。

エピソード14 D保育者 「気になる子についての堂々巡り」

（「保育を行っていて感じる先生にとって気になるなと思う子はいますか」の質問に対して）色々本を読んだり、色々するけれども、でもわからない。で、だんだんわからないものなんだってわかってきた。っていうのが最近のところ。最近の本読んで先生方と話をする機会もあって、もっとダイレクトに答えがあるものだ、その答えを求めていたような気がするんです。これをすればわかるんじゃないか、こういう勉強をしたらこれは問題があってこれは問題がない、どっかでそういうすっきりしたい部分で、あるじゃないですか。でも、そういう答えはないんだっていうのが今の感覚。それが正解かどうかかわからないですけど、わからないものなんだっていうように、そういうものなんだっていう感じ方をしている。[略] 気になるけれども、いつもあるんですよ、焦る気持ちは、これでいいんだろうか。でも、答えがない。どうしたらその中で自分は、やっぱり模索しながら、もがきながらやっていくしかないのかなっていうような、今はそういう感じ方ですかね。答えが欲しいって思いますけどそういうものじゃないのかなって。

この保育者は、「気になる」子と向き合うときの思いを語っている。目の前にいる子どもとのかかわりの中でスッキリしないモヤモヤを抱く。そして保育者の中で色々と考え、研修会に参加をしたり、学習をして専門知識を取り入れたり、専門機関との連携などに取り組んでみるが、なかなか子どもの状態に合致する答えに出会うことがない。しかし保育者は自らが抱くモヤモヤを解消したいため、新たに何かを探すというサイクルがあるようである。このようなサイクルを繰り返しながら、「答えがないもの」であり、「わからないものだ」という理解をして、モヤモヤした思いを抱きながら模索していこうとしている姿が語りから読み取れる。

総合考察

聞き取りから見えた〈気になる子〉

本研究では、保育者の語りから〈気になる子〉に対する捉えや視点がどのようなものであるかを明らかにすることが目的であり、そのため2つの項目を設定した。一つはテクニカルタームのように使用されている「気になる子」についての意識を聞き、次に保育を行っていて中で感じる〈気になる子〉についての意識を聞いた。

まず、テクニカルタームのように使用されている「気になる子」についてであるが、保育者は研修などの学習で「気になる子」という言葉に触れ、外部から与えられた知識として「気になる子」を理解していた。そのため、「気になる子」は軽度発達障害や発達障害と同一線上の様な理解をしていて、ある一定の状態の子どもをイメージしてしまう言葉にもなっている。

た。そのため、保育者がかかわっている子どもが、発達障害なのか、それとの関係性の問題なのかもわからない、いわゆるグレーゾーンの子どもに対して「気になる子」と呼ぶことに抵抗がある。故に実際の保育現場で「気になる子」という言葉は使用されることはない。

そのかわり、保育者は「気になる」という言葉を使用して子どもの具体的な様子や状態を互いに伝えあっている。この「気になる」という言葉は、発達障害と結びつく言葉ではなく、保育者の主観で語られているため、具体的な子どもの様子を一緒に伝えて「気になる」という言葉を使用していた。保育者の中には「気になる子」と「気になる」という言葉を使い分けている方がいたが、意識せずに使用している方もいた。保育者にとって「気になる」という言葉はそれだけ日常の言葉であるということであろう。

次に、保育を行っている中で感じる〈気になる子〉であるが、生活の中に困り感がある子どもや全体をみた時に感じる違和感など、保育者が経験や子どもとの出会いから積み上げてきた感覚で「気になる」ということを感じていた。他にも保育者が経験の中から枠を作りだし、その基準を満たすかどうかポイントになる場合もある。また、一人の保育者の中にも「気になる」ポイントがいくつもあり、具体的なものとしてではなく感覚的な部分があった。そして、子どもの状態への視点だけではなく、他の保育者からの評価を気にするために不本意ながら保育者が子どもに「気になる」と感じてしまう場合もある。

実際に保育現場で使用している「気になる」という言葉は、保育者の主観で使用され、日常の言葉として用いられていた。ところがその言葉に突如、別の意味が与えられて登場し、保育現場に浸透していったのだろう。

〈気になる子〉をどう捉えるか

本研究から得られた結果を受けて、〈気になる子〉をもう一度考えてみたい。

まず、現在保育現場で使用されている「気になる子」は、主語が「子どもの様子」になるだろう。例えば「落ち着きのない子ども」「トラブルが多い子ども」といった具合である。一方、保育者が日頃使用していた「気になる」は、子どもが「気になる」のであり、「気になる」視点は保育者が持っていることになる。『私が』違和感を持つ子ども』『私の』判断基準を満たさない子ども』といった具合である。それは子どもの様子を見て、保育者が〈気になる子〉ということがいえる。

前者の場合は問題の所在は子どもにいくことになり、それは「落ちつきがない」や「トラブルが多い」という子どもの状態である。しかし後者の場合は、子どもと保育者との関わりが問題に含まれることになるし、保育者の子どもを見る視点も問題に含まれることになる。

このような視点で先行研究を見直してみたい。まず、〈気になる子〉が気にならなくなる場合について。これは、〈気になる子〉が変化したのではなく、〈気になる子〉と関わりをもつ保育者の視点が変わったことが考えられる。また、子どもの育ちということも十分に考えられる。この場合の〈気になる子〉は、保育者の主観で見ていることが考えられる。そのため、視点が変化することで新たな気になることが生まれてくることも考えられる。

次に巡回相談など専門職が保育現場に入りコンサルテーションを行う場合。これは、専門職が入ることで保育環境の見直しや子どもの状態を整理することが可能になるだろう。そのことで、保育者の視点に変化が起こることも考えられるし、子どもが生活しやすい環境を整えることも可能になるだろう。しかし、コンサルテーションは有効な手段・方法だとは思

られるが、専門職の人数や専門機関の都市部への偏りなど、いつでもどこでも利用できるような状態にあるとは言いがたいだろう。また専門職としてやってくる人によって、保育現場で保育を土台にした支援方法ではなく、子どもの障害という視点から個別支援の助言を行い、保育現場で個別支援に取り組むことになる可能性があり、これは保育者に対して更なる負担を強いることになりかねない。

また、チェックリストや5歳児健診は、子どもに対して発達の躓きなどを発見する、子どもの特性を見極めるという意味で有効な手段だと考えられるが、子どもたちが保育場面で示す様子は必ずしも発達障害とは結びつかず、家庭環境に由来するものか子どもが持つ障害特性なのかについての判断は難しい。さらに、今回の聞き取りから、保育者が抱く「気になる」という感覚は多岐に渡り、しかも子どもの生活に近い所に保育者の「気になる」という感覚の視点がある。子どもに対して得手不得手など特徴を知り、保育に活かせるような事柄を知るようなチェックリストであれば、保育の参考になるのかもしれないが、「気になる子」であるかどうかのチェックリストであれば、保育者が感じている問題の解決に結びつくとは考えにくい。

このように、〈気になる子〉に対する保育者の捉えの変化によって、保育を支援するポイントが変わってくる。〈気になる子〉を子ども個人の問題としてだけで捉えるのではなく、関係性の視点、環境の視点など複数の視点から注意深く観察していくことが子どもを理解するために必要なことなのではないだろうか。

今回の調査はあくまで1つの幼稚園での聞き取りの結果でしかないため、今後の課題としては、条件設定を変えて引き続き調査していくことが必要である。ただ、保育者への聞き取りを行った先行研究が見当たらない点、調査の結果〈気になる子〉という言葉が持つイメージにより、保育現場であまり使用される言葉ではない点など意義のある研究になったと思われる。

注

本研究では〈気になる子〉と表記する。気になる子の表記に関して、決まったものがなく統一されていない。そのため、特に子どもの様子などを特定しない、あらゆる表現を含めたものとして使用する。また、術語化されたような使用の場合は「気になる子」、一般的な意味での使用の場合は「気になる」と表記した。

文献

- 藤永 保.(2009).「気になる子」もどう向き合うか—子育ての曲がり角.(p30).東京:フレーベル館
- 深谷英治, 江田裕介.(2011).他児との関係形成が困難な「気になる」子どもに対する保育コンサルテーション.和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 21, 9-16.
- 刑部育子.(1998).「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析.発達心理学研究, 9, 1-11.
- 浜谷直人.(2009).巡回相談—専門職が子どもの現場に出向く時代.浜谷直人・芦沢清音・飯野雄大・五十嵐元子・宇野敦子・田中浩司・照井裕子・三山岳(編), 発達障害児・気になる子の巡回相談—すべての子どもが「参加」する保育へ.(pp1-14).京都:ミネルヴァ書房.
- 日高希美・橋本創一・秋山千枝子.(2008).保育所・幼稚園の巡回相談における「気になる子どものチェックリスト」の開発と適用.東京学芸大学紀要総合教育科学系, 59, 503-512

- 肥後功一.(2001).“気になる子”の心理臨床的理解(第1報).*鳥根大学教育臨床総合研究*, 1, (61-77).
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉 嘉子・飯島 典子.(2003).保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査.*発達障害研究*, 25, 50-61.
- 本郷一夫・飯島典子・平川久美子・杉村僚子.保育の場における「気になる」子どもの理解と対応に関するコンサルテーションの効果.*LD研究*, 16, 254-264
- 本郷一夫.(2010).「気になる」子どもの理解と保育.本郷一夫・飯島典子・杉村僚子・平川久美子・平川昌宏(編).*「気になる」子どもの保育と保護者支援*.(p2)東京:建白社.
- 本郷一夫.(2011).保育の場における「気になる」子どもの発見—発達の「ズレ」と集団適応との関連.本郷一夫・麻生武・別府哲・吉中淳・小池敏英・五十嵐一枝・足立智昭・川越総一郎・藤崎真知代・亀田良一・田中敦士(編).*シリーズ子どもへの発達支援のエッセンス:3 認知発達のアンバランスの発見とその支援*.(pp59-60).東京:金子書房.
- 井口 均.(2000).保育者が問題にする「気になる子」についての傾向分析.*長崎大学教育学部紀要, 教育科学*.59, (1-16).
- 伊勢田亮・倉田新・野村明洋・戸田竜也(共著).(2003).*障害のある幼児の保育・教育*.東京:明治図書出版
- 飯島典子.(2008).「気になる」子どもの遊びの成立を促す保育者の働きかけ.*東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 57, 327-338.
- 石倉健二, 仲村慎二郎.(2011).「気になる子ども」についての保育者と小学校教員による気づきの相違と引き継ぎに関する研究.*兵庫教育大学研究紀要*, 39, 67-76.
- 小枝達也・関あゆみ・前垣 義弘.(2007).ちょっと気になる子どもたちへの理解と支援——5歳児健診の取り組み.*LD研究*.16, 265-272.
- 鯨岡 峻.(2007).発達障害ブームは「発達障害」の理解を促したか.*そだちの科学*, 8, 17-22.
- 倉持清美.(2000).保育的視点から刑部論文(1998)を読んで.*発達心理学研究*, 11, 224-226.
- 増田貴人・七木田敦.(2000).保育園における「ちょっと気になる子ども」の観察事例に関する記述:不器用さの目立つA児の変容過程.*幼年教育研究年報*, 22, 71-71.
- 佐伯 胖.(1995).*「学ぶ」ということの意味*.東京:岩波書店
- 田中秀明.(2009).保育者養成校の学生が抱く「気になる子」についての基礎的研究.*清泉女学院短期大学紀要*, 27, 55-65.
- 田中康雄.(2005).発達障害の支援の向こう側:発達障害支援論序説.*教育と医学*.No2005 (13-21).
- 田中康雄.(2008).*軽度発達障害—繋がりがあって生きる*.東京:金剛出版.